

月刊

地域保健



●特集

見える 使える 地域診断

—保健師活動を効率よく進めるツール

●フロントランナー

武田恭子さん《国富町 保健介護課 介護係 副主幹》

●ピープル

川口加奈さん《特定非営利活動法人Homedoor 理事長》



6 特集

見える 使える 地域診断

— 保健師活動を効率よく進めるツール

8 【概 論】 今なぜ地域診断か？

島田美喜（地域医療振興協会 ヘルスプロモーション研究センター）

15 【事例1】 負担を増やさず効率よく情報収集 新潟県南魚沼市

26 【事例2】 5町村が合併し誕生した町健康課題を分析 愛媛県愛南町

34 【事例3】 新人の疑問から始まった地域診断 大分県日出町

42 【展 望】 地域診断再考 岩室紳也（ヘルスプロモーション推進センター）

1 フロントランナー ▶ 武田恭子さん（国富町 保健介護課 介護係 副主幹）

48 FOCUS ▶ アルコール健康障害対策基本法と保健師への期待

52 REPORT・1 ▶ 『市町村保健活動のあり方に関する検討フォーラム』開催

55 REPORT・2 ▶ 日本保健師連絡協議会 平成 25 年度活動報告・集会

60 隔月連載 ▶ 東日本大震災で求められている公衆衛生活動とは《第2回》

80 ニュース ▶

97 ひよこ、ホップ、ステップ、ジャンプ！ ▶

岸本 悠さん（美浜町 健康づくり課）

102 ピープル ▶ 川口加奈さん（特定非営利活動法人 Homedoor 理事長）

連載

⑥⑥ 保健師のための閑話ケア《第42回》

藤本裕明

⑦⑦ 中臣さんの 環境衛生ウオッチング《第27回》

中臣昌広

⑦⑤ いまどき子育てアドバイス《第201回》

中川信子

情報BOX

81 ……訪問に役立つ“安心・安全”の豆知識、BOOK、月間リーダー、information、月間リーダー special edition？

武田恭子
さん

● 国富町 保健介護課 介護係副室長

民間、行政の垣根を越え、健やかなまちづくりを目指す

保健師同士が連携、協力し合える体制をつくりたい

宮崎県国富町は、宮崎市の北西に隣接する県中部の町。役場を訪れ、武田恭子さんにお会いすると、まずはインタビューに先がけて、町をひと回り案内してくれるとのことだった。

車で町の中心部を少しあとにすれば、美しい田園や山林が重なるように広がっている。その自然に抱かれるようにに民家が点在し、清々しい空気が流れている。ハンドルを握りながら、各所を説明してくれる武田さんの言葉からは、生まれ育った地元への深い愛情が伝わってきた。



子育てと仕事の責任感の間で葛藤した20代

親戚に看護師が多いことから、自分もそうなることを目指していたという武田さん。だが、研修時に保健師という職業の魅力に触れ、猛勉強の末に旧鹿児島県立保健婦学校を卒業した。

幸いにも、その年に郷里の国富町で求人があり、当時の住民課衛生係に配属される。ただし、それは武田さんにとって苦難の始まりでもあった。

就職したとき、国富町の保健師は、1歳年上の先輩がいるだけだった。当時は現在の倍にも上る出生率。最初の業務といえば、2人で来る日も来る日も予防接種に奔走することだった。そして、就職して4年目に、頼りだった先輩が退職してしまう。保健師が、1人だけになってしまったのだ。24歳で結婚した武田さんは、折しも1年前に出産したばかり。一手に仕事を受けな

ければならない忙しさと、幼い娘の子育ての間で葛藤する。

しばらくして、2人の後輩が入ってきた。26歳で上司という立場になってしまったことも、武田さんに重くのしかかった。

「当時は、予防接種・健診・訪問といった目先のことをこなすだけで精一杯。私自身、まだまだ未熟だったので、十分に後輩を指導することができませんでした。とにかく私がやっていることを見てもらうしかなかったのです」

行政と民間の垣根を取り 介護保険をスムーズに導入

その後、もう1人後輩が入り、1994（平成6）年に、福祉課在宅介護係という部署に異動。実は、介護の分野は、武田さんにとっては、未知の世界も同然だった。「デイサービス」とか「ヘルパー」とかいった言葉が出てきても、「いったいどういうこと？」

見える 使える 地域診断



保健師活動を効率よく進めるツール

業務分担制の広がりや業務量の増大などにより、保健師の地域を把握する力の低下が懸念されている。地域を把握する方法としては「地域診断」があるが、理解の仕方には幅があり、多忙を理由に実施していない自治体も少なくない。そうした中、新しい保健師活動指針では「地域診断に基づくPDCAサイクルの実施」を保健師の保健活動の基本的な方向性として掲げた。特集では、地域診断の基本論をはじめ、実践している自治体の好事例、これからの展望などを掲載する。

P8 【概論】今なぜ地域診断か？

◎島田美喜（地域医療振興協会 ヘルスプロモーション研究センター）

P15 【事例1】負担を増やさず効率よく情報収集

◎新潟県南魚沼市《文・太田美由紀》

P26 【事例2】5町村が合併し誕生した町の健康課題を分析

◎愛媛県愛南町《文・高田英弦》

P34 【事例3】新人の疑問から始まった地域診断

◎大分県日出町《文・白井美樹》

P42 【展望】地域診断再考

◎岩室紳也（ヘルスプロモーション推進センター）



今なぜ地域診断か？



地域医療振興協会
ヘルスプロモーション研究センター
島田美喜
(しまだ・みき)

保健師活動の基本であるはずの地域診断は、なぜ「保健師活動指針」に明記されなければならなかったのか。本来の保健師活動における位置付けはどうなのか——これらを整理するとともに、今の保健師の置かれた状況に合った地域診断について説く。

各業界で「地域診断がブーム!？」

「地域診断」をインターネットで検索すると、公衆衛生に関することと並んで、さまざまな分野の論文や報告書などがヒットします。地域再生・まちづくりでは、地域の環境、文化、経済等を把握して地域診断を実施し、その結果を基に分析、評価して、地域再生の提案を行う事例や、地域を元気にするために、住民のコミュニケーションへの認識などを把握できるチェックリストを作成して分析する事例がありました。地域包括ケアでは、新たな調査をするのではなく、介護保険事業計画や地域福祉計画など既存データを活用した地域診断方法の開発がなされていきました。今や地域診断は本家本元である公衆衛生の専売特許ではなくなっているようです。

ひるがえって、公衆衛生分野では、きたものの「大変だから人を増やしてくれる」ことは今後とも期待できませんと。となると、今いる人数で取捨選択して優先順位を決めて活動しないかぎり、職場が疲弊してしまうでしょう。

結局、これらに共通しているのは、地域の現状如何に関わらず、事業ありきの活動組み立てになっているということです。よく「地域特性に合った活動をしましょう」と枕詞のように言われますが、地域特性に合った活動とは真逆のことが現場で起きているのが現状ではないでしょうか。そんな今だからこそ、地域に何が起きているのか、起きそうなのを見極めた活動をするために地域診断が必要なのだと思います。

地域診断の現状

平成23年度に日本公衆衛生協会の委託で実施した「市町村保健活動調査」

2013（平成25）年4月19日に厚生労働省健康局から発出された「地域における保健師の保健活動に関する指針」で、保健師の保健活動の基本的な方向性として、地域診断に基づくPDCAサイクルの実施が示されました。保健師であれば誰もが基礎教育で学習しているはずの地域診断ですが、今なぜ改めて保健師の活動指針に明記しなければならないような事態に陥っているのでしょうか。

今なぜ地域診断か？

地域保健法施行以降、保健師が業務ごとの分散配置になり、自分の受け持ち地区という観念がなくなり、自治体の全体像が見えなくなってきたのではよく言われていることです。

もう一点、老人保健法による保健事業に代表されるように、国が事業要綱で内容や回数まで事細かに示して、そ

の回数によって補助金が支払われるという補助金行政が、地域の現状から立脚した事業を組み立てる機会を奪う要因の一つであったと思います。ただし、補助金行政の最中でも、地道に地域診断から活動計画を組み立て、むしろ自分たちの計画に合う補助金をうまく使っていた自治体もあります。こういった軸のぶれない活動をしてきた自治体は、どこから何が降ってきた自分の自治体での優先順位を考えて行動されているように思います。

さらに市区町村では、業務量が増大してきているとよく言われています。実際、特定健診・特定保健指導に代表されるような個へのアプローチの増加、多問題を抱え関わりが長期化するための増加とその意味は違っていると思いますが、業務に振り回されていると感じている人は多いかと思えます。いずれにせよ、公務員定数が増えない中で、なんとか保健師数だけは増えて



町民から信頼される 保健師を目指して ただいま生活習慣病予防に奮闘中!

きしもと はるか
岸本 悠さん

●美浜町 健康づくり課



文=白井美樹 (ライター) 写真= C.Kent

若狭湾の澄んだ海と緑深い森林に抱かれた、自然豊かな福井県美浜町。

岸本悠さんは、生まれ育ったこの町をこよなく愛する、3年目の保健師さんだ。郷土自慢を聞くと、「海がきれい」「魚がおいしい」「へしこも美味」という答えがすぐに返ってきた。へしことは、塩漬けにしたサバなどの魚をさらに糠につけた、美浜町の名産品だ。

夢は看護師から保健師へ

子どものころの岸本さんは、かなり活発な少女だったようだ。3歳年上の兄の友人に交じって、サッカーをやったり野球をやったり。いつも外で体を動かして遊んでいるのが好きだった。

そんな運動好きの岸本さんが、高校で進路を決めるときに、まず思い描いたのが「小学校の体育の先生」になることだったという。ただし、もう一つの夢も、どうしてもあきらめきれな

かった。それが、「看護師」になることだった。お母さんが看護師をしていたので、とても身近であこがれの職業だったのだ。

結局、看護師を目指して国立病院機構大阪医療センター付属看護学校に入学。

しかし、2年生のときに受けた実習がきっかけで、将来の夢を保健師にスイッチすることになる。

「病院実習で、生活習慣病に苦しんでいる患者さんと接したときに、その前に予防できないものかと考えるようになりました。その際に、保健師という仕事のことを知ったのです」と岸本さんは振り返る。

決断は速かった。保健師の資格を取るために、神戸市看護大学へ3年時に



▲保健師としての夢を語る岸本さん

編入。地域保健に視点を置いて、実習や論文をこなした。ただし、念願の保健師の資格を取ったものの、すぐに保健師になったわけではない。卒業して2年間は、京都の病院で看護師として勤務を続けたのだ。

「もともと看護師になりたいという夢からすべてが始まったことだったので、この仕事も経験しておきたいという気持ちがありました」と岸本さんは言う。

ホームレス状態を生み出さない社会の扉を開きたい
困窮者の就労・生活支援は地域の活性化にもつながる



特定非営利活動法人Homedoor 理事長
川口加奈さん
聞き手 高田英弦（医療記者）

大阪はパリにちよっぴり似ている。御堂筋はシャンゼリゼ通り、中之島はシテ島に相当。初代通天閣はエッフェル塔とエトワール凱旋門を模して設計された。近年市街に広がりつつあるシェアサイクル「HUBCani（ハブチャリ）」は、花の都の「Velib'（ヴェリブ）」をほつぷつさせる。もっともハブチャリは公共事業ではない。職や住まいを失った生活困窮者を手助けする特定非営利活動法人Homedoor（ホームドア）が展開する就労支援事業。23歳の社会活動家、なにわジェンヌの川口加奈さんが主導する。今月は彼女の歩みと取り組み、心意気を紹介する。

「誰もが野宿せず暮らせる世の中に変えていきたい」

— いつごろから生活困窮者の支援にかかり始めたのですか。

川口 中学2年生の冬、14歳になった直後からです。ミッションスクールに通い、学校YWCA部に属していました。部活動の一環で大阪市西成区の寄せ場「釜ヶ崎」を初めて訪れ、路上生活者への炊き出し奉仕活動に参加。ホームレス状態に至る個人的事情だけ

でなく社会的背景にも強い関心を抱き、誰もが野宿せずに暮らせる世の中に変えていきたいと痛感しました。

高校を卒業するまで炊き出し、支援物資集めなどの手伝いを続けました。また路上生活者への偏見を解消すべく、何度も校内外で講演会やワークショップを催しました。しかし活動経験が増すにつれて無力感にさいなまれ、もどかしさが募るばかり。過酷な路上生活に苦しむ人が増えることはあっても、減ることはなかったからです。

PROFILE

●かわぐち・かな●

1991年、大阪府にて出生。中学2年時に路上生活者への支援活動に参加。以来炊き出しや支援物資集めのボランティア活動を続ける傍ら、ホームレス問題に関する講演会・ワークショップを多数開催。2010年、大阪市立大学経済学部2年時に任意団体Homedoorを設立（11年10月、NPO法人格認証）。在学中に大学生OF THE YEAR 2011グランプリなどを受賞。12年には世界経済フォーラムのグローバルシェイパーズコミュニティ大阪メンバーに選出された。

おにぎりを配れば喜ばれ、空腹を満たしてもらえ。実に有意義と思う。でも毎日配れない。仮に1日3食配れたら、ホームレス状態から抜け出せる人は増えるだろうか。あれこれ自問自答するうち、対症的な活動にとどまらず、現状の根本的改善につながる方策を考案し、実行していかなければ